

2021年10月24日 礼拝説教要旨

詩編講解説教83「信仰と静寂」

詩編83：2～5、マルコ4：35～41

詩編第83編は「民の嘆きの詩編」に分類されます。この嘆きは、イスラエルが民族存亡の危機を何度も経験していることに起因しています。特にアッシリアやバビロニアによって国が滅ぶという経験はイスラエルの人々にとって決して癒えることのない深い傷となりました。さらに捕囚から帰還した人々が国を再建しようとするのを妨害する勢力が現れます。ネヘミヤ記には周辺国によって再建が妨害される様子が記されています。「サンバラトとトビヤ、それにアラブ人、アンモン人、アシュドドの市民はエルサレムの城壁の再建が進み、破損の修復が始まったと聞いて、大いに怒った。彼らは皆で共謀してエルサレムに攻め上り、混乱に陥れようとした」（ネヘミヤ4：1～2）またエステル記にも、ペルシャの王クセルクセスによって「ユダヤ人は一人残らず滅ぼされ、殺され、絶滅させられる」という勅令が帝国全土に出されます。

そのような中で詩人は祈るのです。「神よ、沈黙しないでください。黙していないでください。静まっていないでください」（2節）ここには三回も沈黙しないでくださいという言葉が繰り返されます。ある翻訳では「静観する」としています。あなたの民が窮地に立たされているのに、なぜ静観しておられるのか。すぐに立ち上がって行動してください。そういう切実な願いがあります。わたしたちが祈る時というのは、大体、苦しい時、切羽詰まった時ですから、そこには緊急性があります。しかし、多くの場合、神さまはすぐには応えてくださらないように思える。神さまが静観しているように感じる。今、応えてほしいのに、神さまはなぜ黙っておられるのか。そういう疑問があります。それゆえ人は、この神さまの沈黙についていろいろ思い巡らしてきました。それはわたしたちの信仰を試しておられるからとか、より深い祈りへと導くためだという考え方もあります。さらにはこの神さまの沈黙をテーマにした文学も生まれます。遠藤周作の『沈黙』などはその代表的なものでしょう。

民族殲滅の恐怖は経験したものでなければ分かりません。現代のわたしたちにはそういう経験がありません。ですからこのような詩人の嘆きはなかなか理解が難しいように感じます。しかし世界の歴史はジェノサイド（大量虐殺）抜きには語れないものがあります。何より戦争そのものがジェノサイドでしょう。わたしたちの国も広島と長崎、二つの原子爆弾が投下され一瞬にしてあわせて二十万人以上の方々が亡くなりました。ナチスによるユダヤ人虐殺では六百万人。ユーゴスラビアで、ボスニアで、ルワンダで、そういうジェノサイドが繰り返されてきました。そこでも「神よ、沈黙しないでください」という祈りが繰り返されたことでしょうか。それでも神さまは静観しておられたのだろうか。彼らの信仰を試しておられたのでしょうか。

スペインの画家フラシスコ・ゴヤが描いた「マドリード1808年5月3日」という絵があります。市民が銃殺刑にされる場面を描いたものです。銃口の先には白いシャツを着た男性が両手を広げて悲壮な表情を浮かべています。この男性の両手には傷があって、それはキリストを表していると言われます。キリストがこのような人間の罪の悲惨を担い十字架で死なれたことをゴヤは表現したのでしょうか。絶望的な状況の苦しみ、恐れ、痛みを主は誰よりも早く、誰よりも近くで経験されていた。すでに行動を起こしておられた。あの十字架において。わたしたちはそのように信じることができます。遠藤周作の『沈黙』でも踏み絵を踏んだパードレに主は語りかけます。「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのだ」と。

改めて「祈りが聞かれる」とはどういうことなのかを考えます。主イエスは言われました。「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい」(マルコ11:24)「願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」(マタイ6:8)とも言われた。このような御言葉を聞くときに、祈りが単なるこちら側の一方的な行為、願い事だけではないということがわかります。そこではわたしたちが祈る前から、その祈りを先回りするようにして、わたしたちと共に祈り、その存在を委ねているお方がおられる。その痛み、苦しみを十字架で担っておられるお方が一緒に祈っておられる。それが祈りであり、そういう祈りをわたしたちは祈るのです。

わたしたちは祈っても神さまが黙っておられるようにしか感じられないかもしれない。しかしこの神さまの沈黙に合わせられるようにして、わたしたちは祈っているのです。祈りは沈黙、静寂の時です。祈りにおいて神さまとわたしたちは一つになる。いみじくも、4節で詩人は自分たちが「あなたの民」「あなたの秘蔵の民」といいます。「秘蔵の民」というのは大切にかくまうということです。神さまご自身のものにしてしまわれる。窮地に立たされているわたしたちに対して、それでも「あなたはわたしの民だ」と言われるのです。そこに平安があります。祈り求めるものはすべて既に得られたというのはこういうことではないか。

ナチスに捕らえられ処刑された牧師ルードリヒ・ボンヘッファーが獄中で書いた詩があります。部分的に引用します。

わたしは何者か。彼らはよくわたしに言う。わたしが自分の獄房から、平然と明るく、しっかりとした足取りで、領主がその館から出てくるときのように歩み出ると。

わたしは何者か。彼らはわたしにこうも言う。わたしが不幸の日々を冷静に、微笑みつつ誇り高く、勝利に慣れた人のように耐えていると。

わたしは本当に他の人々が言うような者なのか。それとも自分が知っているような者でしかないのか。籠の中の鳥のように動揺し、懂れて病み、誰かに首を絞められたときのように息をしようともがき、色彩や花々や鳥の声を求めて飢え、渴いたようにやさしい言葉や人間的なぬくもりを求め、恣意や最も些細な無礼にも怒りにふるえ・・・疲れ、祈り・思索し・創造する余力はもはやなく、くたびれ果てて、みんなに別れを告げる用意をする・・・

わたしは何者か。人前では偽善者、そして自分の前では軽蔑すべきメソメソした弱虫なのか。わたしは何者か。ただひとりでこう問う時、その問いはわたしを嘲る。わたしが何者であれ、ああ神よ、あなたはわたしを知りたもう。わたしはあなたのものだ。

ボンヘッファーの葛藤がにじみ出ています。最後「わたしはあなたのものだ」その救いの確信の中で彼は生涯を全うしました。「生きるにも、死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。わたしがわたし自身のものでなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであることです」(『ハイデルベルク信仰問答』問1) このために主は十字架においてご自身の命を代償にして、罪を贖いを成し遂げてくださいました。そのようにしてわたしたちをキリストのものにしてくださいました。あなたの民、秘蔵の民にしてくださいました。これで十分です。ここに祈りは聞かれたとの確信があります。